スポーツ、二つの輝く嶺

～または「見るスポーツ」と「するスポーツ」～

田所金久

輝く二つの嶺

東京オリンピックの前年となり、スポーツへの関心は高まっているが、スポーツそのものについて議論することは意外に難しい。それはマスコミが、オリンピックの金メダルを頂点とするチャンピオン・スポーツについてのみ議論していることが大きく影響している。しかし、相手とルールに敬意を表すというスポーツの本質は共通だが、金メダルの嶺だけではなく2つの輝かしい嶺がある。２０１１年に成立したスポーツ基本法は、①スポーツを文化としてとらえ、スポーツの享受は基本的人権と明記した。②競技力向上を、国民との関係で「人間の資質の向上」に寄与する意義があるものと位置づけられた。③21世紀のスポーツは「世界平和」と「環境への配慮」などに寄与していくものと規定した。日本体協のスポーツ宣言ではユネスコ憲章も高く掲げられている。

このスポーツの一つの嶺はオリンピックや世界選手権を争う「チャンピオン・スポーツ」であり、才能・努力・闘志が讃えられる。マスコミなどはこの側面ばかり報道している。しかし、もう一つの輝かしい嶺がある。「地域スポーツ」「生涯スポーツ」「みんなのスポーツ」などと呼ばれる、健康維持・人とのつながりを目的とするスポーツの輝かしい嶺である。例えば、私の住む土佐市では、私もその創立に関わった「総合型地域スポーツクラブ」・NPO法人「総合クラブとさ」があり、「多世代」「多種目」「多志向」という3つの特徴を持ち「私も土佐市も　もっと元気に」をスローガンに、二つの会場で50のサークルが自主的・主体的に運営されている。

私が少し関わった卓球界は、『ミスター卓球』と世界の人々から敬愛された荻村伊智郎の提起で、早くからスポーツにはチャンピオンを争う嶺と、生涯スポーツの二つの輝かしい嶺があると提起してきた。東大医学部にも依頼して、健康を維持するにはどんなスポーツが良いか研究してもらい卓球が良いという結論を出してもらった。本来卓球は「100mを疾走しながら複雑な連立方程式を解く」ような競技である。卓球は場所と連さと回転の総合芸術であるとも言われる。そこで高齢者や家庭婦人でも楽しめる為に、直径の大きい球を使用するラージボール卓球を開発した。日中国交回復20周年を記念して日中両国の友好都市がチームを作り、競技をする大会が北京で開かれた。使用するボールは、まだ世界では知られていなかったラージボールであった。私は高知市の監督として参加し、ある晩、北京飯店のロビーでぼんやりしていると荻村さんがやってきて、なぜこの国際大会をラージボールで行うか説明してくれた。それは、「中国は今世界のチャンピオンだが、14億の国民から見ると、スポーツのできるのは一握りの人である。やがて10億の人が競技するようになるとラージボールが最適である。その普及のためにラージボールを使用した」と語ってくれた。

プロスポーツ・イチローは仏である

キリスト教など一神教では神は「在る者」、仏教では人が「なる者」である。

「仏教の思想の根底に、世界は苦であるが苦の原因は人間の欲望にあるという考えがある。この欲望を完全にコントロールするのが仏です。私は現在、日本人で欲望のコントロールを完全に実行しているのは、イチローではないかと思います。イチロー選手は、仏に近いと言っても御釈迦さんは反対しないと思います。」

これは２０１１年刊行、梅原猛と五木寛之の対話である『仏の発見』での梅原猛の発言である。今年3月、最も話題になったのは自己との勝負に命を懸けてきて、笑って死んだ（彼は引退を「死」と表現）イチローである。私は3つの報道に関心を持った。

①彼との会見からその野球観を伝えた毎日新聞の記事。

「野球は団体競技であると共に個人競技でもあるから好きである」「いまアメリカの野球は考えるのではなく、力による野球に変質しつつある。日本は絶対にこの真似をしてはならない。もっと人間的に考える野球を。」

②三谷幸喜「ありふれた生活」（朝日新聞）

イチローさんの会見を見て・・・質問に対して、動じる瞬間が微塵もない。常に冷静で平常心。質問者に敬意を払いつつ、丁寧に言葉を尽くして答え、内容の深さと人間的魅力で、その場の空気を支配していく。ユーモアも決して忘れない。完璧である。・・・日本人では他にも見当たらない。

③落合博満（朝日新聞）

実績を残し続けると、私もそうであったが、アドバイスしてくれる人はいなくなる。それが一番の苦しみ。バッティングって自分にしか分からない。血のにじむ努力を重ね、一人で磨きあげたものなんだから。イチローのような境地に達した打者なんて、ほぼ皆無・・・おれは「技術屋」だ。そうやって彼の事を眺めていたよ。

スポーツとナショナリズム

オリンピックの表彰式で、国歌が演奏され、国旗が掲揚されると思っている人が多いが、それは誤解である。オリンピック憲章は国旗・国歌ではなく、その選手団が選んだ「団旗」「団歌」と明記している。台湾（中華台北）の選手が優勝し、「台湾国歌」が演奏されたら、中国は大会をボイコットするという混乱が起こる。ＩＯＣはナショナリズムの高揚につながる国旗・国歌を止めようとしたが、当時の「愛国心」高揚を目指した発展途上国や「社会主義」国の反対で断念し、「団旗」「団歌」で妥協したのである。

南北朝鮮のチームが、民衆の愛する「アリラン」を使用したことも記憶に残る。国際卓球連盟はスポーツによるナショナリズムの高揚を嫌い、表彰式での国旗・国歌は使用してこなかった。ラージボールの第一回の国際大会でも「世界」とは言わず「地球選手権」と呼んだ。手塚と卓球がオリンピックの競技になる時、国際手塚連盟会長嘉納治五郎も世界卓球連盟会長荻村伊智朗も、消極的な時があった。ナショナリズムの問題で悩んだのである。

オリンピック・ムーブメント

オリンピックは「競技大会」とは言わず「運動」と呼ぶ。参加選手は国の代表ではなく、主体的な個人で、民族差別などは無い。だから湯川秀樹も協賛した、核兵器廃絶を目指すアピールをアインシュタインと共に提起したイギリスの哲学者バートランド・ラッセルは「オリンピック運動は20世紀の最大の平和運動だ」と述べた。

いまオリンピックは「お金がかかりすぎる」「利権争い」「環境破壊」など多くの問題を抱えている。「持続可能な社会」をキャッチフレーズにしているが、東京大会でも施設建設に多くの木材が必要で、アジアの熱帯雨林を伐採し続け、地球温暖化問題にかかわっている。安倍総理は「原発事故は収拾している」と「復興五輪」を掲げたが、東北の復興にむしろ困難をもたらしている。ＪＯＣが「開催の為わいろを贈った」という疑いをもたれ、会長が辞職に追い込まれた。

私はアメリカ大統領が広島・長崎を訪問できる環境を作るため、国民の基金で「ヒロシマと長崎で開催」を高知新聞の「声　ひろば」に投稿し採用されたが、その翌日、広島市は財政問題で議会内の反対もあり立候補を断念した。オリンピック憲章は分厚いが、その総則だけでもインターネットを使うなどして読んでもらいたいと思っている。オリンピックは平和運動でなければならない。

有森裕子・・・現状は復興五輪に向けて進んでいるか見えません。メダルもその色が本物になるかは、後の生き方次第。震災のことや共生、共存の社会、障害者への対応などについて、人々が五輪前よりも考えられるようになることが最終的な成功。

山下泰裕・・・柔道家として学んだことを、生活や人生に生かしていく、それが出来て初めて真の柔道家と言えるはずです。

小出義雄・・・スポーツは楽しみながら、自分の限界に挑むもの。

日本のスポーツ界と指導者の在り方

モスクワオリンピックのボイコットを政府に強要され涙をのんだ日本のスポーツ界は、自立を目指してＪＯＣを創立した。成果もあげている。しかし、そのＪＯＣを含め多くの競技団体が問題を抱えていることは報道されているところである。ここでは日本のスポーツ界の発展の為に、指導者のありかただけを述べておきたい。かつての「根性論」は次第に弱まっては来ている。「さらば根性論」の時代が来ている。スポーツを支える医科学は非常に発達した。情報も得やすくなった。経験や選手との上下関係に頼って教えるのではなく、選手が「なりたい自分」に成長する支援のできる指導者になること、指導者自身が学び続けることが必要になっている。脳科学は上からの押しつけでは、前頭葉は発達せず、スポーツで大切な他人への共感感情も連帯感も生まれないという。

マスコミはスポーツには「二つの輝く嶺があること」を目覚し報道してもらいたい。

私の高校時代の若干の経験から

スポーツは勝負を争い全力を尽くすものだと普通言われるが、高い技術を必要とする登山というスポーツは勝負を争うものではなく自己実現を目指すものである。私は高校生時代卓球部に属し、顧問の先生は森という剣道の達人であった。まだ剣道の復活がGHQから許されず卓球部の顧問になってくれていた。まだ体育館の施設が十分でなく、雨の時は教室での講義であった。その時、森先生から「田所　試合に臨んで何が一番大事か」と質問された。私は「コンディションを整えること」と回答したと思うが、先生は「それは一番ではなく、相手を尊敬する心だ」と言われた。高校生活の中で一番心に残る言葉であった。入学式のときの生徒部長でこれも剣道の達人である加賀野井先生の言葉も忘れられない。「君たちは人間である。木や石ではない。何か一つ打ち込むものを持て」の言葉で、運動能力の低い私も卓球部に入部した。高校のＯＢ会では「田所は運動能力は一番低かった。しかし努力はした。だから卓球界を背負う位置になった」と言われる。「無能・無才にしてこの一筋につながる」「この道や行く人なしに秋の暮れ」という松尾芭蕉の言葉をいつも思い出していた。